

講演会・シンポジウム報告

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2021 年度連続講演会

連続講演会「ユニバーサル・コミュニケーション・デザイン」 第一回講演会「インフォグラフィックとビジュアルコミュニケーション」

日時：2021 年 5 月 29 日 (土) 13:30-14:40

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：153 名

講師：櫻田 潤 氏 (インフォメーション・デザイナー)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

情報が溢れ、流れるスピードも加速化する今、どう情報を届けるのか。デジタルメディアや SNS、広報活動におけるインフォグラフィック活用の基本を学びます。講演会当日は、なぜビジュアルコミュニケーションが必要なのか、インフォグラフィックとは何か、どんな風に情報をビジュアルにまとめるのかなどもお伝えします。

〈報告〉

情報化社会の発展に伴い、わかりやすいコミュニケーションの重要性がさらに増しているが、昨今のインフォグラフィックやビジュアルシンキングの普及を考えると、コミュニケーションを狭義の「ことば」に限定せず、視覚的な要素なども含めて広く捉えた形で議論する必要がある。また、ユニバーサルデザインをコミュニケーションの向上に反映させた「ユニバーサル・コミュニケーション・デザイン (UCD)」という考えがあるが、そこでもコミュニケーションや「ことば」を広く捉えた議論がされている。

一方、本学のような多文化・多言語環境における「わかりやすいコミュニケーション」の実現はこうした知見があっても未だ困難な課題であり、当事者が様々に工夫しているが解決が難しいと感じる者が少なくない。多文化・多言語環境が広がる現代社会において、同じような困難を抱える者は少なくないだろう。こうした環境下で UCD を推進する術については管見の限りではまだ参考になる先駆例が見当たらない。

そこで、多文化・多言語環境において「わかりやすいコミュニケーション」をデザインするために、関連する諸分野を学ぶという趣旨で開催したのが本連続講演会である。初回にあたる本講演では、デジタルメディアや SNS、広報活動におけるインフォグラフィック活用の基本を講演していただいた。

講師からはまず、単にビジュアルに訴えてグラフィックを利用するのではなく、情報を整理した上で視覚化して発信することがインフォグラフィックであること、そして、どのような思考やツールを利用して情報を整理するかが重要であるというお話があった。そして、情報発信の際には、受信者にとってどのようにその情報が ①興味を持って受け止められ、②理解され、③それを受けて行動が促されるか、という 3 点を考えるようにという指摘がなされた。その上で、受信者の負担をいかに軽減するかが発信者に求められていること、情報の入り方がテキストとビジュアルでどのように異なるかを踏まえ、なぜビジュアルなのかを考えて作成することなど、発信者側が留意すべきポイントをお話いただいた。また、発信者として何をどう伝えるかを考える際に倫理的な観点からも検討することが重要であること、受信者側でも視覚情報のインパクトに騙されず、批判的に受容する姿勢が必要であることが強調された。

ご講演は「座学で終わらず、まずは作成してみましょう」という言葉で締めくくられたが、参加者が UCD の一步を踏み出そうと思える具体的な示唆に溢れるご講演であった。

(文責：小澤伊久美)

連続講演会「ユニバーサル・コミュニケーション・デザイン」 第二回講演会「デジタルコミュニケーションにおけるウェブデザイン」

日時：2021年6月13日(日) 13:30-16:00

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：168名

講師：栗谷 幸助 氏 (デジタルハリウッド大学准教授)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

デジタルコミュニケーションにおいて、その主たるメディアであるウェブサイト。「ことば」の側面だけでなく、その構造や特徴を知り、どう表現していくべきかを理解した上で、ウェブデザインは行なっていく必要があります。今回の講演では、初学者のみならず、ウェブデザインの基本からトレンド、情報発信をする上で意識すべきことをお伝えしていきます。

〈報告〉

本講演では、講師の栗谷先生に初心者を対象にウェブデザインを取り上げていただいた。まず、ウェブデザインに関する基本的な考えのご紹介、そして、最近のウェブデザインのトレンドについて、事例を挙げつつ説明していただいた。また、講演会の後半では、情報発信者が意識すべきことを、多くの大学ウェブサイト为例に挙げつつお話いただいた。

講演のはじめに、ウェブサイトを見る上で、人々の意識はビジュアルの美しさに向きがちであるが、それでは片手落ちで、いわゆる装飾美のみでなく、機能美と装飾美の両面を意識する必要があるというお話があった。その上で、ウェブサイトデザインするには、まず、ウェブサイトによる情報提供の目的やユーザーのニーズを把握するべきであり、その上でシステムとインターフェースの二つの側面について意識してデザインを進めるべきであるということ指摘された。ウェブデザインの基本理論は、そのように目的やニーズを検討する「戦略階層」から「要件階層」「構造階層」「骨格階層」「表層階層」へとデザインを考えていくものであり、最終段階になってからビジュアルデザインを考えるというものだそうである。

はじめに目的やニーズがあって情報をデザインする視点が必要であり、ビジュアル面ばかりに焦点をあててはいけないという点は、連続講演会の第一回で講師の櫻田先生が、インフォグラフィックはビジュアル面に焦点があてられがちだけれども、情報のデザインが重要であり、ユーザーの視点を踏まえたデザインが必要であるとおっしゃったことと重なるご指摘だった。

その後、多くの事例を見ながら機能美と装飾美の両面をいかに意識してウェブデザインがなされているか、どのように改善点を検討し得るかというお話があったが、事例を見る重要性に気付くことができ、見るべき視点がわかった上で分析的に閲覧することの効用を実感できた。特にフォントの選択もデザインの重要な要素になっているのでコンセプトが合致しているか意識すると良いこと、スマホで閲覧するかPCで閲覧するかで見やすい横幅サイズが変わるので、どちらにあわせて1行の文字数を設定するかなど、作成者が自分以外の多様なユーザーの視点をもって作成することの重要性に気付かされた。多言語・多文化環境にいるユーザー体験の理解が鍵であることを意識した講演であった。

(文責：小澤伊久美)

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2021 年度連続講演会

連続講演会「ユニバーサル・コミュニケーション・デザイン」
第三回講演会「学びのユニバーサルデザイン (UDL) のレンズを
通してコミュニケーションを考える」

日時：2021 年 8 月 23 日 (月) 20:00-22:10

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：179 名

講師：バーンズ亀山 静子 氏 (NY 州認定スクールサイコロジスト)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

学習者が学びのエキスパートになるための、そしてそれを支援するための概念フレームワークである UDL。UDL には、学習者にとっての情報の取り入れ方 (理解)、情報の発信の仕方 (表出)、取り組みのあり方に多様性を持たせるという 3 原則があります。理解し発信するということはコミュニケーションであり、そのコミュニケーションを効果的にするものが取り組みですから、UDL を考えることは、まさにコミュニケーションを考えることに他なりません。

UDL 実践では、前述の 3 原則を念頭においてカリキュラム (ゴール、教材、手段・方法、評価) をデザインします。さまざまな情報伝達の方法やテクノロジーがある中で、一つの方法に限定することによってバリアができてしまうことがあります。そのバリアを取り除くにはどうしたらよいのでしょうか。また、バリアを取り除いてアクセスを確保できたその向こうにある「学習者としての成長」をどう支援できるのでしょうか。当日は、UDL を説明しつつ、これらの問いを皆さんと考えていきたいと思えます。

〈報告〉

本講演では、学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning : UDL) を取り上げていただいた。UDL の解説から始まり、UDL の実践を理解するためのワーク、ワークを踏まえた解説へと進んだ。UDL についての初学者向けの講演会では解説に終わることが多いが、今回は具体的な授業案を参加者と共有した上で、その授業案に基づくワークを取り入れた。開催前に数名の方に予め学習者役となることを依頼し、ご協力いただいた。それぞれが持つ特性を伏せたまま、授業者に「ロールプレイのカードは、内容が文字だけでなくイラストでも表現されるとうれいす」等のリクエストを出していただいた。リクエストは掲示版アプリの Padlet に書いてもらい、それを画面共有して参加者全員がスクリーン上で閲覧した。

学習者特性は 12 名分用意されていたが、Padlet の画面があっという間にリクエストで埋まった。それらのリクエストには重複するものが多くあり、誰かにとっての学びやすさは、特性が同じではない他者にとっても学びやすさになり得ることが閲覧している参加者全員に実感できるワークとなった。また、他者のリクエストを見ることで自分もリクエストしたいと思う可能性があること、自分の好きな学び方を全員に強要すると他の誰かにとっての学びにくさにつながる可能性があることなど、多くの気づきがあった。

ご講演は、学習者を含めた周囲の理解が UDL 推進において重要であり、そのためにも UDL の研究・実践者のネットワークを広げていきたいと思いますというお話で締めくくられた。多様な他者への対応を個別にするのではなく UD の観点で対応する意義が実感できるご講演であった。

(文責：小澤伊久美)

連続講演会「ユニバーサル・コミュニケーション・デザイン」
 第四回講演会「パンフレット、案内文書、チラシなどを
 『わかりやすく』作成するために」

日時：Part 1「わかりやすさの基準」とUCDの事例 2021年12月10日(金) 17:00-19:00
 Part 2「わかりやすさ」の研究と実践 2021年12月23日(木) 10:00-12:15

形式：Zoomによるオンライン開催

参加人数：Part 1 131名 Part 2 118名

講師：Part 1 三村一夫氏（一般社団法人ユニバーサルコミュニケーションデザイン協会事務局長）
 Part 2 森下洋平氏（一般社団法人ユニバーサルコミュニケーションデザイン協会
 ユニバーサルコミュニケーションデザイン研究所 副所長）

講演の概要（公示用ポスターより抜粋）

わかりやすさ、とは何でしょう。

相手に重要な情報を伝えるためには、「わかりやすくデザインする」ことが大切です。

これをユニバーサルコミュニケーションデザイン（UCD）と言います。

私たち協会はこれまで、産業・学術・生活者の集合知によって「わかりやすさ」の基準を作り、企業や行政と生活者の良好なコミュニケーションを推進してきました。

今回は2回に分けて、基本的なデザインのポイントから注意点、UCDについて「わかりやすく」お話しします。

〈報告〉

本講演では、一般社団法人ユニバーサルコミュニケーションデザイン協会（UCDA）から講師をお二人お招きし、ユニバーサル・コミュニケーション・デザイン（UCD）についてお話いただいた。Part 1では三村氏に「わかりやすさの基準」とUCDの事例を解説していただいた。Part 2では森下氏に「わかりやすさの基準」のうちフォントや色の問題、みんなの文字やみんなのピクトグラムの開発プロセス（調査からプロトタイプ作成までの具体的なステップ、そしてその繰り返して成果物が世に出たことなど）についてお話いただいた。また、本学が公開しているパンフレットなどを例に取り上げ、UCDAが独自に開発した「わかりやすさを測るための9つの評価基準」による評価を解説していただいた。

ご講演くださった内容は、「わかりやすさ」を考える上で学びの大きいものであった。また、「わかりやすさ」を考える上で「わかりにくさ」を取り除くという発想の在り方、プロトタイプを作ってユーザー体験を確認しながら改善していくという開発の在り方も多くの参加者に参考になったのではないと思われる。

参加者からは、「わかりやすさ」の基準に沿ってデザインを見直すことでどのようにわかりやすさが改善されるかが具体的にわかった、改善の前と後では予想以上の違いが生じることに驚いた、講師の作成された資料や講演の在り方そのものが大変「わかりやすい」もので素晴らしかった、といった声が多数寄せられた。授業だけでなく、病院、一般企業および団体勤務の方などさまざまな所属先の参加者からも業務を見直す良い気付きとなったという反応もあった。質疑応答では多言語多文化の生活者にとっての「わかりやすさ」に関する質問があり、本課題について調査研究を推進する必要性を改めて確認する機会となった。

（文責：小澤伊久美）

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2021 年度講演会・ワークショップ

連続講演会・ワークショップ「第二言語学習における舞台芸術の役割」 The role of performing arts in second language learning

第一回講演会・ワークショップ「言語教育のための漫才ワークショップ」

日時：2021 年 6 月 17 日（木）11:30-13:00

場所：国際基督教大学本館 213 号室および Zoom によるオンライン開催

参加者数：29 名

講師：フランボネ（吉本興業）

藤田 ゆみ 氏（吉本興業）

参加者：ICU 学生及び教員（主に LED102 「言語教授法原論」 受講生）

ワークショップの概要（公示用ポスターより抜粋）

漫才は長年、日本人の間で人気を博しているが、英語やその他の言語でも漫才が披露されるようになり、国際的にも脚光を浴びている。さらに、言語教育や言語学習でも役立つことが明らかになってきた。ワークショップの前半は、漫才の実演と言語教育への応用についての講義、後半は学生たちが実際に漫才を体験するワークショップと発表を行う。本ワークショップは、言語教育メジャーの科目「LED102 言語教授法原論」の授業の一環として行う。また、講演シリーズ「第二言語教育における舞台芸術の役割」の一部として実施する。

〈報告〉

このワークショップの目的は、言語教育や言語学習の方法として、漫才をどのように活用できるか、参加者自身に体験を通して考えてもらうことであった。当日は、日本および海外の学校で漫才ワークショップの活動をしている吉本興業所属のフランボネと藤田ゆみ氏をお招きし、冒頭の 30 分間は複数の言語による漫才（日本語・英語・フランス語）と漫談（日本語・スペイン語）のデモンストレーション、その後の 1 時間は教室とオンラインの参加者による漫才の創作と発表を日本語と英語で行った。

言語習得理論と言語教授法について学んでいる学生たちは、ワークショップを通して、日本で親しまれてきた漫才が、型を学ぶことによって様々な言語で行うことが可能となり、それを言語教育と言語学習に応用できることを、体験的に学ぶことができた。また、漫才の創作と演技を通して、第二言語学習者が積極的に学ぶ姿勢になることを実感した。その他の参加者も新しい言語教育の可能性を感じたと述べており好評であった。漫才は言語の様々な表現を学ぶことができ、創作時のペアでの会話によるインターアクションと、漫才の場面設定やスクリプトの作成から言語の語用論的な側面を理解するのに有効である。さらに、発表時のスピーキングや、言語外の表情、ジェスチャーなどの表現力の面からも豊かな学習材料を提供してくれるという点で、舞台芸術を言語教育に取り入れる革新的なアイデアを提供し、実りあるワークショップであった。

（文責：辻田麻里）

連続講演会・ワークショップ「第二言語学習における舞台芸術の役割」 The role of performing arts in second language learning

第二回講演会・ワークショップ「英語教育における演劇手法の試み について」

日時：2021 年 9 月 23 日 (木) 10:30-12:30

場所：国際基督教大学本館 213 号室および Zoom によるオンライン開催

参加者数：38 名

発表者：金刺 茉莉恵 氏 (明治学院中学校・東村山高等学校教諭)

石上 葵子、吉田 涼、相野谷 優子 (ICU 英語科教職課程学生)

参加者：ICU 学生及び教員 (主に LED217 「第二言語習得と学習」の受講生)

ワークショップの概要

日本国内の学校や課外活動で「英語劇」の活動は広く行われており、また、英語教室や学校の英語の授業の中で演劇的な活動を実施している教員も多い。しかし、演劇的な活動にはどのような効果があるのか、活動の構成にどのような工夫がされているのか、第二言語習得や英語教育の観点からの分析や知見はまだ少ない。本ワークショップでは、実際に英語での演劇活動に取り組んだ例について紹介していただき、体験し、そして、それらの効果や課題について検討することを目的とする。一つ目の例は、ICU の教職課程の学生が三鷹市立第二小学校で開催した「英語×演劇」のワークショップの報告である。そして二つ目の例は、中高一貫校の英語教員の実践報告である。最後に ICU の教職の学生がファシリテーターとして、演劇活動をワークショップ参加者に体験してもらう。

〈報告〉

このワークショップの目的は、言語教育における演劇的活動の方法や効果について理解を深めることであった。

- ① 小学生向け英語ワークショップの報告「英語×劇」(三鷹市立第二小学校にて開催) 10:30-11:00
発表者：ICU 英語科教職課程学生
学生 3 人が小学生向けに企画した「英語×劇」のワークショップについて報告した。昔話として知られている「桃太郎」を題材に、短い場面を英語で演じることが目的であった。ワークショップは正味 1 時間で、感情を込めて、英語の単語を表現する練習、オリジナルなセリフを考える活動、そして発表をする、という展開となっていたとの報告があった。
- ② 高校の英語授業における劇活動の報告 11:00-11:30
発表者：金刺茉莉恵教諭 (明治学院中学校・東村山高等学校)
発表者の金刺先生の学校では高校 1 年生が班に分かれて英語劇を行う。生徒が台本を作り、舞台上で発表する。金刺先生は、教員としてどのように台本づくりから発表まで導くのか、また、劇活動で生徒がどのように成長できるのか、教員として苦勞している点などについて紹介された。
- ③ 「英語×○○」ワークショップの体験とディスカッション 11:30-12:30

ファシリテーター：ICU 英語科教職課程学生（石上葵子、吉田涼、相野谷優子）

三鷹市立第二小学校で実施したワークショップと同じ内容を参加者に体験してもらった。さまざまな場面における“Really?!”の表現方法を試したり、桃太郎のセリフを考え、役を割り振って発表するところまで体験した。教室での参加者もオンラインの参加者も参加した。

最後の質疑応答や参加者からのコメントに基づき、本ワークショップからは以下のような発見があったと言える。まず、小学生も高校生も演劇活動が楽しそうだったということが参加者にとっては印象的であった。そして、小学生にとっては「伝える」こと、「伝える内容」が中心となる活動であったが、その活動の中に「繰り返し練習する」など英語の習得につながる要素もあったことがわかった。一方高校生の活動では、日頃、英語の授業で達成感を得ることができない生徒が活躍できる場面であることが伝わってきた。座学に比べて主体的に関わることが要求され、またモチベーションを高める活動にもなりうるという魅力も発見できた。そして、劇を演じるにあたって、小学生の場合は鬼の視点から考えてみてセリフを作る、あるいは高校生の場合は自分たちで台本を作ることで言語活動の中にも批判的思考 (critical thinking) やリベラル・アーツの視点を取り入れることもでき、全人的な言語活動になり得る。多くの学びのあるワークショップであった。

(文責：藤井彰子)

講演会・ワークショップ
「ライティング評価とフィードバック再考
－人間と機械の共存という視点から－」

日時：2021 年 12 月 4 日 (土) 13:00-16:30

場所：Zoom によるオンライン開催

参加人数：46 名

講師：田中 真理 氏 (名古屋外国語大学名誉教授)

坪根 由香里 氏 (大阪観光大学観光学部教授)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

ライティング評価は、そのフィードバックも含めて、人間が行う場合にも機械が行う場合にも、それぞれ強みと限界があります。これからのライティング評価は、人間と機械の共存という形で、つまり、その限界を知ったうえで、それぞれの強みを活かした形で考えるのが効率的だと思われます。本ワークショップでは人間と機械の「いいとこ取り」について考えます。具体的には、①「評価用フローチャート」と②オンラインのライティング評価支援ツール GoodWriting Rater の活用法をご紹介します、参加者のみなさまに実際に使っていただき、その結果等をご一緒に検討したいと思います。

〈報告〉

本講演会・ワークショップは、ライティング評価における人間と機械それぞれの強みと限界を考えることを目的に、講師の解説とグループワークによって進められた。パート1では、講師が人間によるライティング評価と機械によるライティング評価の違い、および評価用フローチャートとレベル別サンプルの解説を行い、パート2では参加者がグループに分かれてフローチャートを用いたライティング評価を実践した。その後、各グループの評価結果を全体で共有し、講師がフィードバックを与えた。パート3では参加者がオンラインの教師支援ライティング評価ツール GoodWriting Rater を試用し、機械によるライティング評価がどのようなものであるかを体験する機会を得た。

本講演会・ワークショップは2019年に企画されたものであったが、コロナ禍による度重なる延期を経て二年越しに開催が実現した。当初は対面開催を計画していたが、状況をふまえてオンライン開催に切り替えたことから、体験的かつインタラクティブなワークショップをオンライン上で進めるための工夫が必要となった。資料と課題の事前配布や、ブレイクアウトルームを用いたグループワークはその一例である。これらの工夫により、講演会当日は限られた時間を有効に活用し、講師と参加者のやり取りを増やすことができた。

参加者の多くは日本語教育に携わる大学教員であったが、学生や一般の参加者も複数見られた。海外からの参加者も多く、場所や時間を超えて集うことができるオンライン開催のメリットを実感した。一方、オンライン型のイベントは気軽に申し込めるせいか、対面時より当日の欠席者が出やすいというデメリットもあった。今回のようなグループワークを含むイベントでは無断欠席がほかの参加者への不利益にもつながるため、今後は参加条件を厳しくするなどの対策を取る必要があるだろう。

本講演会・ワークショップでの学びは参加者の教育実践にすぐに活かせる実用的なものであり、全体的な満足度は高かったと言える。すでに自身のライティングサンプルに活かしたという声や、対面での再開催を望む声が聞かれたことから、フローチャートやツールを用いたライティング評価に対する期待と、それが与えるインパクトの大きさを改めて実感した。(文責：相場いぶき)